

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡 / 湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報



今年の門松



有料入館者17万人目達成

2007



地元小学生の地域学習



早川・老平金山遺跡見学会にて

新年 あけましておめでとうございます

皆様が晴れやかな気持で新しい年をお迎えしたことでしょう。

当館も、ご来館くださるお客様、そして多くの関係者の皆様のお力添えをいただき、開館から10年目という大きな節目の年を迎えることができました。

地域活性化の拠点としての役割はもちろん、近年では地元の学校利用も随分増えてきました。各学校のニーズにも対応して参りますので、どんどん博物館に訪れてご活用ください。

これまでの10年を振り返り、そしてこれからの10年先を見越した明確なビジョンを持って、初心を忘れず博物館職員一同、気持を引き締め、未来に向かって新たな一歩を踏み出していく所存です。これから先も、「地域に愛される博物館づくり」のスタイルは変わりません。

本年も変わらぬご指導、温かいご支援を賜りたく、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

地域遺産を活用した地域再生を検討

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館長 谷 口 一 夫

「ランドスケープから見た産業遺産と地域再生」をテーマに、湯之奥金山遺跡における現地ワークショップが、昨年11月25日(土)～26日(日)の両日、現地調査と金山博物館における基調報告・パネルディスカッションの日程で開催された。主催は金山博物館と世界不動自然・文化遺産研究会「WINCH研究会」(会長田畑貞寿千葉大学名誉教授)で、地域の遺産である湯之奥金山遺跡はじめ、聖地・身延山久遠寺や下部温泉郷などを見直し地域再生(活性化)を考える研究集会となった。

ランドスケープとは直訳すれば「景観」だが、ここでいうところの意味は深く、『自然・自然環境、自然遺産、そこにある文化・文化遺産・民俗遺産、産業・産業遺産などを「包括した景観」を指し、それを活用した地域活性化を現地の実情に照らし考える』というもので、今回のワークショップ(研究集会)は、この視点で「身延町」を考える機会となった。田畑会長は、ユネスコの世界遺産登録の調査(評価)委員を務め、これまでギリシャの宮殿やタイの寺院の調査に関わり、現在は富士山の世界遺産登録に向けた学術委員会の副委員長を務めるが、会長を務める「WINCH研究会」は、これまでモヘンジョ・ダロやベトナム、中国麗江、ラオスのルアンパバーン、モンゴルのオルホン溪谷、国内では鎌倉、日光、熊野古道などで現地における調査研究を進め、世界遺産を保全するためのデータベース作成や保全計画の枠組みを検討するなどの実績を重ねてきている。

今回はこのWINCH研のメンバーである田畑会長はじめ、由布院温泉の再生にも関わった森戸哲氏(地域総合研究所代表)、荒井紀子氏

(亜細亜大学教授)、今回のコーディネーターを務めた秋山寛氏(WINCH研事務局長)、そして谷口一夫(湯之奥金山博物館長)のメンバーでパネルディスカッション(討論)が行われた。

第1日目は、13時に身延駅前集合、町のバスで身延山久遠寺を参拝、ロープウェイで思親閣へ登り、富士山や湯之奥金山のある蝙蝠山、富士川の悠久なる流れ、南アルプス、八ヶ岳や甲府盆地の素晴らしい景観を眺望、さらには湯之奥集落とその周辺を散策。夜は下部温泉郷のホテルで交流会を行った。

第2日目は、野中邑浩身延町助役から歓迎の挨拶を頂いた後、金山博物館内を案内、また湯町を散策しながら現地調査、昼食は下部温泉名物の蕎麦に舌鼓をうった。午後からは主催者である田畑会長からWINCH研の活動が報告され、つづいて「甲斐黄金村・湯之奥金山博物館の活動」と題し基調報告を谷口一夫が行った。国史跡の湯之奥中山金山のガイダンス館としての役割や、日常の館活動、館外活動としての「黄金の国ジパング」(東国の金山遺跡と黄金文化)の世界遺産登録運動や、地域活性化の「富士川流域王国」運動などの在り方を報告した。これを受け田畑会長、森戸哲氏、荒井紀子氏、谷口一夫の順に発言(詳細は後日報告)、会場からも発言があり盛り上がった。

特に森戸哲氏は、エコミュゼ(仏語)という産業遺産を地域活性化に活かす一つの手法としてフランス国内で提唱された内容について解説、過疎地域の活性化策としてフランス全土で取り上げられた事例が報告された。最後に博物館の館外活動について館のキャパを遥かに超えた活動だという評価を頂いた。

「1人でも多くの町民が訪れる施設に」

身延町観光課

基本方針達成のための課題

合併後2年を経過し観光立町「身延」を掲げて観光部門を独立させた本町では、観光振興を進めるために、現状と課題を抽出しそれぞれの課題解消に向けて事業を進めております。課題解消については、新しい身延町づくり＝観光振興という位置付けを前提としています。この「観光立町」実現のためには、効果的で継続性のある息の長い施策の積み重ねが必要です。

金山博物館は、開館10周年を迎え、入館者も年々増加しております。観光課としても町の主要観光施設として「なかとみ和紙の里」等と同様に重要な観光拠点と位置付けております。

現在、県は「観光立県やまなし」を提唱し、平成19年から始まるNHK大河ドラマ「風林火山」も集客の一大イベントとして観光行政を推し進めております。本町も「観光立町」を唱え県の指導をいただきながら新しい身延町のまちづくりを行っております。

さて、皆さんは“観光”と聞くとどのようなイメージを持たれるでしょうか？地域の魅力を伝えることを“観光”と定義するならば、これまでは、観光客に対して名勝・名物・温泉などの紹介のみに終始し、地域に根ざした歴史や文化という本質的かつ大切な観光資源に目を向けなかった、気がつかなかったのが現実です。

時代の変化や社会の成熟とともに観光も変わり始めています。成熟した地域の観光は、一過性の物見遊山より参加・体験型、通過から長期滞在型へと進化しています。

このことは、まさにこれからの新しい身延の町づくり・地域再生のコンセプトになると確信します。

この町を訪れる観光客は、まず訪れた施設でその町を判断すると言っても過言ではありません。ですから、甲斐黄金村・湯之奥金山博物館のような観光施設の役割は、非常に重要になります。町の観光ガイドの役割も担っております。

また一方で、同館は、日本の金山史研究においても先駆的な位置付けがされ、学術的に全国レベルで高い評価をいただいております。このことは、毎年行われる博物館事業の「公開講座」の講師陣の顔ぶれを見ても一目瞭然です。それ

ぞれの分野で日本のトップクラスの講師陣が揃います。

身延を日本一にするより甲斐黄金村・湯之奥金山博物館を日本一にした方が、早いと言っても過言ではありません。

観光課としましては、「住んでよし、訪れてよし」の地域づくりを今後の観光町政に活かしたいと考えております。

この実現のためには、まず、住んでいる人(町民)が自分の町を知ること、そして自慢できることが重要なポイントを占めます。

平成18年度観光課ソフト事業として『みんなで身延町を知ろう「ふれあい 小さな旅」』を行い旧町ごとに視察研修をしていただきました。新しくなった町内を皆さんに研修していただき、町の財産(観光資源)を共有していただき皆さんを介して「身延」を宣伝していただきたいと考えます。身延は財産(観光資源)を沢山所有しております。町内各地をお訪ねください。そして皆さんの口から身延の良さをお伝えください。

また、ハード事業としては、本栖湖の「千円札の富士山の撮影地」に公衆トイレを建設しました。

本栖湖のある富士箱根伊豆国立公園は、自然景観が優れた地としてその景観の保存が最優先され、厳しい規制のため整備等の計画が立ち遅れていました。

この地は、年間を通して多くのカメラマンが訪れる地として有名であり、残された自然を堪能するために多くの観光客も訪れています。しかし、訪れた観光客に対応できる駐車場、トイレが整備されておらず交通・環境面で長年にわたり問題を呈してきたところです。この建設により、それまで本栖湖のみで観光を終えていた観光客が、ここを経由して下部温泉・身延山を訪れることが期待できます。湯之奥金山博物館を始めとする各施設が、町の外交施設としてより深いつながりを持ち、本町が目指す自立的観光への道標になるように、それぞれの立場で研鑽を積むことが大切に思います。これからも、一人でも多くの町民が、観光客が訪れてくれる施設づくりに努めてください。

活動報告

平成18年度公開講座（第46回～50回）

～黄金がもたらした日本文化～黄金の国ジパングの深層を探る②

「黄金がもたらした日本文化～黄金の国ジパングの深層を探る②～」というテーマで、昨年10月から平成18年度公開講座が始まっております。

今年度初回の講義は、鶴見大学文化財学科教授の中里壽克先生に「金工芸品の世界～蒔絵」という演題でお話をいただきました。

蒔絵は8世紀頃から日本で見られ始めたものですが、そこに使われている「金」を顕微鏡写真で観察すると、その形は米粒状のものから丸い形のものまで大小様々な自然金を使っていることが分かります。そうした事例を挙げながら、砂金があったからこそ蒔絵が始まったのだということを、時代の経過とともに確実に進歩して

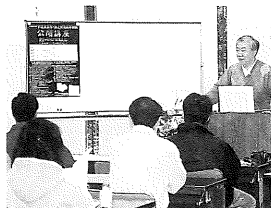


10月 中里壽克先生

いった蒔絵技術についてお話をされました。

11月の講義では甲州金研究で馴染みの西脇康先生に「甲州金・江戸小判の輝き」というお話をいただきました。

甲州金座と江戸金座、甲州金の仕組みと江戸小判の仕組みなど、一般的に混同されやすい類似点と相違点を分かりやすく事例を挙げながら、また新たな視点で甲州金の価値についてお話されました。「金貨」という内容に、誰もが興味津々で聞き入っていました。



11月 西脇 康先生



12月 柳本伊左雄先生

第3回目となる講座では、身延山大学仏教学部教授の柳本伊左雄先生をお招きし、「蘇れ仏像・黄金の輝き～ラオス・ルアンプラバン・仏像の修復の記録～」と題して、市街地全体が世界遺産に登録されているラオス・ルアンプラバンでの大学生と行った仏像修復の様子について、スライドを使ってお話されました。その中で、ルアンプラバンはクメールやスコタイといった仏教文明の影響を色濃く残す貴重な仏像が多数残されている街だが、その多くが無造作に放置され、害虫被害等による損壊の危機を迎えている現状をお話されると同時に、こうした修復作業を通じて仏像制作当時の技術の研究と、地元の人々に修復技術を教え少しでも多くの仏像を残して行くことが課題であると締めくくられました。

1月20日は「安土城と大阪城に見る金箔瓦の世界」と題し、大阪城天守閣館長・中村博司先生にお話を頂き、2月17日は「先端産業と都市鉱山」と題し、当館の小松美鈴学芸員が担当します。皆様のご聴講をお待ちしております。

『金山史研究 第8集』刊行準備中!

演 題	講 師 名
戦国時代・河内の山に生きる	信州大学教授・人文学部副学部長・歴史学博士 笹本正治
穴山氏と河内領	前山梨県史編さん室長 秋山敬
甲斐と駿河を結ぶ道	身延山大学教授・文学博士 望月真澄
河内の産業と経済の歩み	山梨大学教授 齋藤康彦
古代の甲斐国	山梨県立博物館・歴史民俗博物館館長 平川南
10周年記念特別収録（ワークショップ基調報告・パネルディスカッション） 湯之奥金山現地ワークショップーランドスケープからみた産業遺産と地域再生ー	

昨年度の講演会をまとめた『金山史研究第8集』を近々皆様のお手元にお届けするべく刊行準備をすすめております。一般販売予定は3月末の予定。収録内容は表のとおりです。

秋の遺跡見学会 【黒川金山（甲州市10月21日）、老平金山（早川町11月5日）】

郷土に残る貴重な歴史の現場を自分の足で歩き、学習するという趣旨で毎年開催している遺跡見学会ですが、今年度の見学地は甲州市・黒川金山と早川町・老平金山の2か所で、今回も多くの皆様のご協力とご参加をいただき、無事に終えることが出来ました。

10月21日は甲州市・丹波山村両教育委員会との共催で黒川金山遺跡見学会を開催いたしました。登山道の途中の道々で、植物や山のキノコなどについて楽しい雑談を交えながら遺跡現場まで案内して下さったのは、丹波山村の木下勲氏。そんな話を聞きながら、途中参加者たちが立ち止まり、キノコを探す風景もしばしば。

遺跡現場では、甲州市教育委員会の飯島泉氏に詳細な説明をいただき、参加者たちは甲斐金山を代表し、湯之奥金山とはまた趣の異なる坑道やテラスの、遺跡現場全体の佇まいに感動すらしていた様子でした。（関連記事6、7ページ）

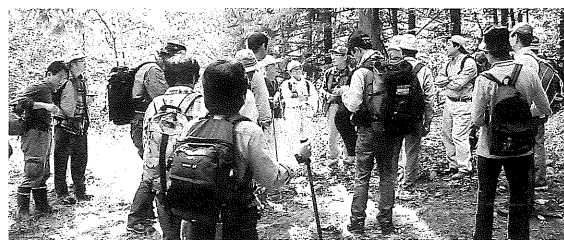
見学会第2弾の11月5日は、日本上流文化圏

研究所と早川町教育委員会との共催により、老平遺跡見学会を開催いたしました。

現地への案内は早川町雨畑在住の知識経験者の鈴木長雄氏にお願いし、晴天のもと少し遅い紅葉を眺めながら、現場までの約40分の道のりをいつもと少し違ったハイキング気分でのんびりと歩いていきました。

道の途中には近代の遺構が、そして遺跡現場には新しい時代の坑道と古い時代の坑道が残っており、参加者たちは鈴木さんの説明を聞きながら、現場を探検していました。

また来年度もあらゆる形の見学会を計画していきますので、楽しみにしててください。



有料入館者17万人目は桑原さん（浜松市）

10月7日(土)

去る10月7日、土曜日の午後、当館は有料入館者17万人目をお迎えすることが出来ました。

この幸運を手にしたのは静岡県浜松市からお越し下さった桑原由利子さんです。

桑原さんはお友達と一緒にこの下部温泉へ日帰り温泉旅行にやってきて、この幸運に巡りあったということでした。



思わぬ幸運に喜んでくださる桑原さん(左)とお友達(右)

チケットご購入後、17万人目の記念入館者となったことを告げると大変喜んでくださり、温泉に入ってきたということで髪型など身だしなみを気にしながらも、その後の記念撮影や町ケーブルテレビ（SCT）の取材にも快く応じてくれました。

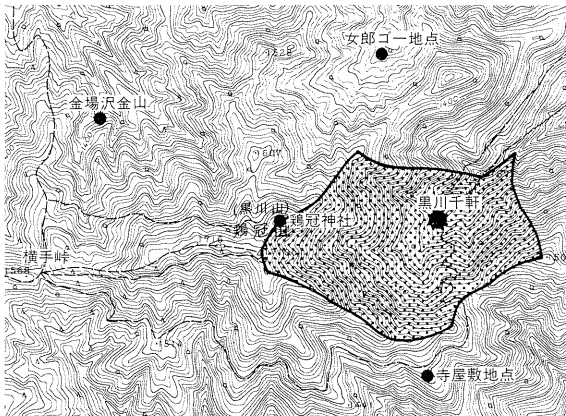
「ゆっくりのんびりの旅」が思わぬイベントの主役となり、館内ご観覧と砂金採り体験を楽しまれ、お二人は「また来ます」と元気に館を後にされました。後日、桑原さんから改めて御礼のお便りをいただき、館のスタッフもまた嬉しい気持ちになるとともに、来てくれた全てのお客様に喜んでいただけるようにと気持ちを引き締めました。

冬のイルミネーション見に来てください

12月～2月

各地でイルミネーションが盛んですが、下部温泉郷も来てくださったお客様に喜んでいただこうと、イルミネーションを飾り皆様から好評をいただいております。今年はリバーサイドパークの木造遊具「わんぱく丸」に光を集めました。わんぱく丸は静かな輝きで彩られ、夜の闇に浮かび上がっています。点灯は午後4時30分から午後10時まで。2月まで点灯していますので、是非足をお運びください。





山梨県甲州市・大菩薩嶺の北にそびえる鶏冠山（標高1,710m）の東側山腹、標高1,200m～1,400m付近に位置する黒川金山遺跡。黒川千軒の鉱山町跡は、通称黒川谷とよばれる谷を埋め尽くすように形成され、その規模は上下600m、最大幅300mの広大な面積を占め、遺跡の上端と下端との標高差210mに及んでいます。湯之奥・中山金山遺跡とともに甲斐金山を代表する金山遺跡として国史跡に指定されていますが、（史跡指定面積：70.55[㍉]）、東京都水道局管理下の水道水源林でもあります。

遺跡が存在する鶏冠山は「武田の軍資金を産出していた山」という言い伝えが語り継がれ、現在は山梨百名山の一つにも数えられ登山愛好家にも人気のある山です。「けいかんざん」と呼ぶ人も少なくないようですが、本来は「とさかやま」と呼ばれたもので、山頂付近にある切り立った山が鶏のトサカの形に似ていることから名づけられたとされています。岩が切り立っているような険しい山頂には、金山の守護神であった「鶏冠神社」の奥宮がありますが、現在、鶏冠権現はこの鶏冠山山頂の奥宮と高橋集落の里宮とに別れて存在します。

黒川金山周辺には、牛王院平金山、竜喰金山、丹波山金山など戦国時代からの操業が考えられる金山が大小多く点在します。最盛期の黒川金山について、これら周辺の金山の状況や江戸時代に書かれた史料から類推すると、16世紀初頭から操業し、16世紀中ごろに最盛期を迎えたことが分かります。またテラスの規模からも相当数の人が山で暮らしていたものと考えられます。しかし天正5年(1577)には「於金山黄金無出来」ともありますので、盛期を迎えた反面、すでに衰微し始めた状況をうかがうことも出来、さらに17世紀中ごろ以降には衰退の一途を辿っ

ていったものと考えられます。

ちなみに、金山遺跡につきものの「〇〇千軒」などという表現は、最盛期に向かって人々が一か所に集まり、衰退と共に人がいなくなり消えていく鉱山町の様を端的に捉えた呼び方とも言えますが、黒川金山にも「黒川千軒」という呼び名が残っています。湯之奥金山にも同様に「中山千軒」、「湯之奥三千軒」という伝承が残っています。

黒川金山についての過去の研究は、1926年に小葉田淳氏による「甲斐・信濃・駿河の金山—武田時代の稼業を中心に—」（※1968年『日本鉱山史の研究』再録）を代表的研究として、他には、江戸時代の黒川金山の試掘についてまとめた村上直氏の「黒川金山」『日本歴史141号』、泉昌彦氏が現地踏査や伝承収集によりまとめた『信玄の黄金遺跡と埋蔵金—甲駿の巻—』（1975）に著されていたのみでした。

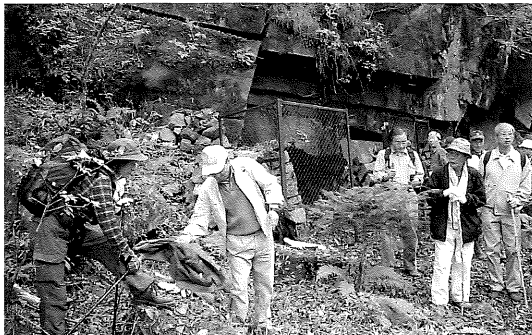
今村啓爾氏（東京大学）が黒川金山遺跡の調査に着手し始めたのは1984年のことです。黒川金山遺跡研究会を発足し、事前準備を整え広報活動で周知した結果、85年には三菱財団の助成金と、その後読売新聞社の後援を得て遺跡調査に乗り出した経緯があります。1986年から1989年までの4年間の学術調査の結果、坑道や製錬場・屋敷跡や多数の鉱山臼・金粒のついた土器、陶磁器が発掘されました。

また昔時にこの辺りに寺院があったという伝承に由来して「寺屋敷」と呼ばれる地点からは、礫石に教典の文字を書いて埋納した「一字一石経」が13,453点採集されています。経石の多くは名のとおり1文字しか書かれませんが、まれに「多字一石」といわれる複数の文字が書かれたものもあります。この多字一石経の検討から、埋納されている教典は「法華経」であると断定され、さらに経石の数も、法華経の総字数である6万点以上があるのではと推定されます。



遺跡内に残された
大きな磨り臼

テラスとその周辺の斜面63,700㎡という広大な遺跡で、調査面積はそのうちの合計185㎡と、全体の1/340に過ぎませんが、戦国時代の大規模な鉱山遺跡であり、その調査データは極めて重要で、この調査に連続する形で3年間の湯之奥金山の総合学術調査がありました。この両金山の合計7年間に亘る調査により、それまで手の付けられていなかった中世・戦国期の甲斐金山の様子と、甲斐の金山は日本の鉱山の先駆けであったことが明らかになったのです。この成果は鉱山史上において非常に意味のある大きな成果であり、その後の鉱山史研究を牽引するものでした。



近代坑道の前

さて、黒川金山遺跡は急傾斜の谷あいであり、この調査・測量によって確認されたテラス数は290か所、また坑道（＝坑口）の分布も広範囲に及び、中には埋まったものか自然の窪みか判然とししないものもありますが、大小27か所の坑口が確認されています。また、遺物には、多数の鉱山白（磨り白、磨り石、叩き石（唐白）、黒川型挽き白）が発見されています。割合としては磨り白、叩き石の方が多く、磨り白に至っては小形のものから他には見られない大形のものまで、形状は様々です。中には黒川金山沢の流れの中にはさまっている大形の磨り白もあります。

黒川金山の鉱床は、石英閃緑岩中に胚胎した含金石英脈で、再結晶作用をうけてその隙間を方解石が充填し、一部が自然金、他は黄鉄鉱などの硫化鉱物などと共生しているタイプのもので、旧坑の分析から品位は約20g/tと推定されますが、全体の金産出量は戦国期に操業したいずれの金山と同様、定かではありません。しかし、磨り白が多いということから、鉱石の質が柔らかい砂岩が主体であるため磨り白だけで十分対応できたのではないかと判断されます。

なお、黒川金山は明治39年(1906)「黒川金山株式会社」が設立され、再開発の手が入ってい

ます。さらに軍備調達のために旧鉱山の試掘や再開発がなされた産金奨励により、大正～昭和初期にも再開発が試みられていますが、いずれも再び金山として繁栄するまでには至りませんでした。なお、現在も見ることが出来るフェンスで囲われている坑道はその当時に開発されたものと思われます。

さて、中世戦国時代、その最盛期に鉱山経営を支えた金山衆たちがその後辿った歴史は様々で、他鉱山で金掘りとして活躍した者や、技術を活かして水利事業家になった者、帰農して郷土や百姓になった者など、決して一様ではありません。しかし「黒川ヨリ舟越へ罷出金掘」たち18人が「上ノ原用水」の普請を手がけたように、黒川金山関係者では水戸藩の治水事業で成功を収めた永田茂衛門のような人物も輩出しています。金掘りたちが金山を下りて用水工事のような土木事業に従事することはごく一般的なことなのです。

塩山地域内には黒川金山衆の子孫である旧家が現在もなお存続し、当時からその家の位置も大きく変わっていません。金山衆の末裔である田辺左苗家を始めとし、保坂、池田、依田、風間、深沢、古屋、中村、保科、大野、蘆沢、田草川など12の苗字が確認されています。そしてこうした旧家に残る関係史料は、中世から江戸後期にかけてのものであり、これらの文献史料から黒川金山の黎明期や最盛期を辿ることは出来ませんが、衰退期以降の様子や人々の動き、そして黒川金山全体の様子を知ることが出来る貴重な資料となりました。なお、高橋山放光寺、塩山向嶽寺、永久山法蓮寺、金光山妙善寺、宝地山正念寺など金山に係わりのあったとされる周辺寺社は、いずれも黒川から現在の地に転移してきたものと伝えられていますが、火事などで古文書類はいっさい残っていません。

(学芸員・小松美鈴)

参考文献

『甲斐黒川金山 山梨県塩山市に所在する戦国時代金山遺跡の総合調査』1997黒川金山遺跡調査会・塩山市・塩山市教育委員会 編



鶏冠神社奥宮で記念撮影

鉾山道具14点を寄贈いただきました

このたび、身延町下山在住の郷土史研究家・加藤為夫様より、湯之奥金山から出土した鉾山道具14点をご寄贈いただきました。加藤様は湯之奥金山の調査がなされるずっと以前から、湯之奥金山のことをいろいろと調べておられ、調査時にも大変ご協力をいただいた方です。また陶磁器の研究もなされており、鉾山村で暮らした人々の当時の生活を垣間見ることの出来る貴重な資料として、天目茶碗などもご寄贈いただき、開館当初から展示されております。

そんな加藤様から「40年ほど前に山から持ち出されそうになった鉾山道具について、それを止め、これまで他施設に寄託展示していましたが、10年が経過したのを機に、改めて関係が深い金山博物館に寄贈したい」との考えがこのほど実現いたしました。鉾山道具14点は、加藤様のご意志に応えるべく今後、広く調査研究・展示に活用して参ります。加藤様のご好意に厚く御礼申し上げます。

博物館親善大使委嘱

湯之奥金山博物館親善大使として、現在、高岡伸五氏（静岡）、大森直之氏（東京）、野村敏郎氏（兵庫）、広瀬義朗氏（神奈川）4氏にお願いし、湯之奥金山博物館の普及活動を努めていただいておりますが、このたび新たに、原澤英美氏（群馬県）、天野直人氏（静岡県）お二人の方にご承諾いただきご委嘱いたしました。お二人とも「自分ができることで館のためになるなら一層ご協力させていただきます」と快くお引き受けくださいました。親善大使に委嘱している皆さんは、日ごろも博物館ボランティアとして献身的にご協力くださっている方々です。皆様の温かいご支援に改めて御礼申し上げます。

博物館日誌（平成18年10月～12月）

- | | |
|--|--|
| <p>27日(水) 休館日（年末休館（翌年1月1日まで））</p> <p>23日(土) 親子映画鑑賞会「アイアン・ジャイアント」</p> <p>22日(金) 大河ドラマ関連実行委員会（於県立博物館）、UTY撮影</p> <p>21日(木) JTB関東支社社員研修</p> <p>15日(木) イルミネーション開始</p> <p>11日(日) 鹿兒島県・菱刈鉾山、大分県鯛生金山視察（13日迄）</p> <p>10日(日) FM富士「OUT-TOWN」O.A.</p> <p>9日(土) FM富士「OUT-TOWN」O.A.</p> <p>8日(金) 第47回公開講座・柳本伊左雄先生「山梨の遺跡展2007」最終日、古文書類類焼燻処理終了</p> <p>8日(金) 教育事務所指導主事研修、下山中町内巡り、FM富士レポート</p> <p>9日(土) 第48回公開講座・柳本伊左雄先生</p> <p>5日(水) NHK大河ドラマ「風林火山」撮影</p> <p>30日(水) 古文書、木製品燻燻処理</p> <p>28日(火) 館内清掃、体験室改修工事</p> <p>26日(日) 山梨日日新聞取材、館内清掃</p> <p>25日(土) ワークショップ2日目・パネルディスプレイセッション</p> <p>24日(金) 湯之奥金山遺跡における現地ワークショップ1日目</p> <p>23日(木) 下部中秋の写生大会（於博物館駐車場周辺）</p> <p>21日(火) 職場体験学習（下山中・望月真樹君）</p> <p>20日(月) 久那土小4年、学習ビデオ撮影、島根・石見銀山課視察</p> <p>18日(土) 県民の日（観覧無料開放）</p> <p>17日(金) 第47回公開講座・西脇康先生、NHK大河ドラマスタップ下見</p> <p>14日(火) 中山金山遺跡登山（文化庁現地視察登山、双葉中遠足）</p> <p>13日(月) 岩手県遠野市長来館</p> <p>11日(土) 菊の花、博物館入り口に（町内在住・依田良平氏より）</p> <p>10日(金) しもべ物産まつり（於道の駅しもべ）</p> <p>9日(木) 山梨日日新聞取材、展示ケース貸し出し</p> <p>8日(水) 臨時開館</p> <p>5日(日) 老平金山遺跡見学会</p> | <p>11月</p> <p>29日(日) 「巡り展・山梨の遺跡展2006」開催。文教大学付属中学校遠足</p> <p>27日(金) 秋まつり出張砂金採り（於クラフトパーク）FM甲府、PR出演</p> <p>26日(木) 親子映画鑑賞会「ウォレスとグルミット」</p> <p>26日(木) 加藤為夫氏より鉾山道具14点受託、巡回展示資料借り入れ</p> <p>21日(日) 身延南小課外学習、山梨日日新聞取材、小笠原小県内めぐり</p> <p>20日(土) 「みのぶを遊ぶ会」来館</p> <p>20日(金) 黒川金山遺跡見学会</p> <p>19日(木) 下部小2年課外授業</p> <p>17日(火) 山梨日日新聞取材、取材</p> <p>16日(月) 『FLASH EX』取材</p> <p>14日(土) 第46回公開講座・中里壽克先生</p> <p>13日(金) 中山金山遺跡登山（文化庁現地視察）</p> <p>12日(木) 新紺屋小遠足</p> <p>10日(火) 湯田小5年遠足</p> <p>6日(土) 毛無山登山道草刈り、富士見養護学校校外学習</p> <p>6日(土) 大里小5年、柳形北小5年、御坂東小3、4年遠足</p> <p>7日(日) 有料入館者17万人達成</p> <p>10日(水) 毛無山登山・金山遺跡見学（市川警察署署員）</p> <p>12日(金) 湯田小5年遠足</p> |
|--|--|

編集後記

今年の干支はイノシシ。猪突猛進を見習って博物館も立ち止ることなく目標に突き進んでいきたいもの。小さな積み重ねが大きな成果へと

つながっていきます。詩いた種はすぐには芽を吹かないけれど、きちんと育てていけばきっと花を咲かせてくれるはず。将来どのような博物館にしていきたいか、きちんと育てよう、そんな思いを抱きながら2007年スタートです。

博物館だより 第39号 平成19年1月11日

〒409-2947 山梨県南巨摩郡身延町上之平1787番地先 甲斐黄金村・湯之奥金山博物館

博物館HPアドレス http://www.town.minobu.lg.jp/local_minobu/kinzan/index.html 博物館Eメールアドレス yunoking@town.minobu.lg.jp